

古坊中（ふるぼうちゅう）

山で修業を行う修験道は、日本最古の宗教的伝統の一つです。火山である阿蘇山は古代から崇拝されており、中岳の西に広がる平野、古坊中を中心に修行が行われていました。

かつて、阿蘇山の噴火は重要なできごとの兆しであると考えられていました。噴火が起こると、信者は古坊中に行って熱心に祈りを唱えました。山の神々に供物を奉納するおんだ祭りは、この慣習を起源としており、この祭りは今日でも行われています。

鎌倉時代（1185-1333）に最初の建物が建てられて以降、古坊中には何世紀にもわたって八十八か所の「坊」と「庵」と呼ばれる仏教の宿舎が設立されました。そこでは修験者たちが経典を朗読し、ほら貝を吹き鳴らしながら厳しい修行や儀式を行いました。

古坊中の八十八か所は室町時代（1336-1573）に九州の大友家と島津家の戦いで損壊するまで存在していました。坊と庵はやがて山のふもとの現在西巖殿寺がある場所、麓坊中に移されました。